

③ 伯父から話を聞く

中岡 知垂 53歳

1942年4月父は高知県帯屋町（高知駅近く）に生まれました。現在83歳。

最近では、NHK連続ドラマ（あんばん）で舞台になった高知空襲を経験します。

私の祖父は、当時高知県帯屋町で帽子屋を営んでいました。

1945年夏、B29が高知上空を編隊飛行、空襲警報が鳴り響き、父家族は帽子屋にある防空壕へと走りました。ところが防空壕に走りついた時には、既に隣近所の方がひしめき合い、父家族は防空壕へ入れなかったそうです。仕方なく近くにあるお寺の防空壕へ逃げ込み、幸いにも家族全員命を守ることができました。その後、帽子屋の防空壕に焼夷弾が直撃し、入られていた方が全員亡くなったと聞かされたと言います。幼かった父はその記憶が断片的に思い出されると。

当時の状況を知りたく、一度だけ叔父に戦争の話を聞いたことがあります。父の兄（伯父86才）は当時6才、あの凄惨な状況を思い出したくないから話したくないんや、、、と。

ただ一つ、亡くなった方が大きな針のようなものを使い、まるでマグロのように人間が淡々と積み上げられていた事が忘れられない…。と言葉を絞ります。家を失った父一家は、その後一から商売を始めるため、ここ川西に移住することになります。父も叔父も80才を超え、文章にすることが難しく貴重な話を残しておきたく代理で投稿させて頂きました。

戦後80年、戦争体験をされた方は多くありません。あの時防空壕に入れなかった父家族の奇跡で今の自分がある。今ある生活が当たり前ではない事を改めて感じています。